

第十五回 小中学生

ふるさとの詩

入賞作品集



羽生市

第十五回 小中学生「ふるさとの詩」

入賞作品集 目次

◎ 小学生の部（五十音順）

太田玉茗賞 風のゆうびん屋さん

今成 羚愛 村君小学校 六年

宮澤章二賞 大きくなるということ

千葉 士門 手子林小学校 五年

優秀賞 ぼくの川

鎌田 恵澄 村君小学校 六年

わすれないよ

木村 悠聖 三田ヶ谷小学校 四年

とんぼさんありがとう

鳥海 瑠璃子 手子林小学校 六年

奨励賞 ぼくの大すきなかぞく

江原 清眞 須影小学校 二年

尊い

小澤 陽馬 新郷第二小学校 六年

ひまわり

木村 瑠菜 三田ヶ谷小学校 二年

ぼくのお日さま

関根 玲苒 新郷第一小学校 二年

ぼくのおとうさん

堀田 アンジエロ 手子林小学校 一年

その他の良い作品

11

10

9

8

7

6

5

4

3

2

1

◎ 中学生の部（五十音順）

太田玉茗賞 快晴の空を進む雲

関根 快 南中学校 三年

宮澤章二賞 じいちゃんの日課

福田 みさ 東中学校 三年

優秀賞 藍色は勝色

倉橋 樹弘 西中学校 一年

利根川がくれるもの

齊藤 雅人 東中学校 三年

祖父の愛した羽生

藤井 萌恵 南中学校 三年

奨励賞 もう一つのふるさと

五十嵐 千翔 東中学校 三年

思い出

大屋 涉悟 南中学校 三年

うちのお米

神田 憲伸 東中学校 三年

友達と

野口 弥郁 東中学校 二年

希望の花

早川 紗永 南中学校 三年

その他の良い作品

◎小学生の部

太田玉茗賞

風のゆうびん屋さん

村君小学校 六年

今成 鈴愛

私は風が好き
私のまちを吹く風が好き
私のまちを吹く風は
季節のにおいを
いつも私に届けてくれる
春には
野に咲く花たちのおいを
夏には
一面に生いしげる緑のおいを
秋には
たわわに実ったいねのおいを
冬には
ひんやりとおった空気のおいを
私は

風が届けてくれるにおいのゆうびんを
いつも楽しみに待っている
でも

風がばたりとやむ時がある

「今日はもう終わりです。」

何も運びませんよ。」

と 風はやむ

そんな日は

「今日は

ゆうびん屋さんはお休みなのです。」

と私は思う

そしてまた

風は吹きはじめる

私におくりものを届けに来てくれる

風のゆうびん屋さん

いつもごくろうさま

そして

いつもありがとう

また明日も

よろしくお願ひしますね

宮澤章二賞

大きくなるということ

手子林小学校 五年

千葉 土門

毎日通る通学路

晴れの日

春にはおたまじゃくし

夏にはアメンボ

秋にはタガメ

田んぼの中で気持ちよさそうに泳いでいる

それを見るとぼくの心もうきうき

雨の日

虫たちはみんなかくれんぼ

どこに行ったのだろうか

そんなことを考えながら

班長の後ろを歩いていた一年生のころ

転びそうになったときに助けてくれた

重い荷物があるときには持ってくれた

毎日安全に登校できることが

当たり前だと思っていた

高学年になりぼくは班長になった

先頭を歩くと

今までの景色とがらつと変わった

今まで見えていなかったものが

目に飛び込んできた

道にはみ出している草

大きな水たまり

道のすぐわきを流れる水路

一年生が落ちてしまわないかな

すべて転ばないかな

班長になつて

安全が当たり前ではないことに気付いた

私たちは元気に泳いでいるかな

班長のぼくには観察する余裕はない

旧手子林小あとのモニュメント

あと少しで学校だ

学校が見えた

学校に到着だ

今日も無事に連れてくることができた

そう思うとホッとす

高学年としての責任

重いけど軽々持てる自分に成長したい

優秀賞

ぼくの川

村君小学校 六年

鎌田 恵澄

ぼくの家の近くには
川が流れている
おだやかに ゆったりと
流れている
春には
山からとけ出した
雪どけ水が流れてくる
「春ですよ。」
と話しかけるように
サラサラと 流れてくる
梅雨が来て
雨が来て
「ごうごう。」
とまるでおこっているように
勢いよく流れていく

夏

ぼくはボートに乗って川を下る
ゆつくりと川を下る
川はぼくに
すてきな景色をたくさん見せてくれる
川岸に青々と広がる草原
水面を元気よくはねる魚
ぼくの川下りは
ワクワク ドキドキでいっぱいだ
秋
川は静かに流れている
青く澄んだ空を 川面に映して
赤とんぼが
すいすいと気持ちよさそうに飛ぶ
河原のススキは
そよそよとやさしくゆれる
冬
川の水は氷みたいに冷たくなる
「魚たちはどうしているかな。」
など 気になったりもする
川は 流れ続ける
おだやかに ゆつたりと 流れ続ける
ぼくに季節を知らせながら

わすれないよ

三田ケ谷小学校 四年

木村 悠聖

「わー、かわいい。」

家の前の道ぼたで見つけた小さなカメ

ぼくの手がすごく大きく見えた

家につれてかえってやくそくした

ずっと一しよだよと

家族かいぎで 名前はカメキチだ

大好物はしらすぼし

まわりがうるさいと食べない

そーっと見ていると

こうらからニューと首がのびて

一口 二口でムシャムシャ

ぼくがハンバーグを食べている時と

同じような顔をしていた

小さな体で首が長いことにビックリだ

岩の上にあがっていたかと思うと

葉っぱの下にかくれたり

水から顔をだしたり

元気ですごくかわいいな

少し大きくなったね

早く学校からもどった夏休み前

あれ あれ あれ

元気がないカメキチ

スイスイ泳いでいたよね朝は

ぼくは心ぞうがバクバクした

うそだろ

ねているだけだろ

神さまにいのつても 動かない

何年も 何十年も ぼくと一しよに

おおきくなるゆめを見ていたのに

お母さんの所へもどりたかったのかな

気づいてあげられず

ごめんな くるしかつたんだね

大きなひまわりがさいているそばに

カメキチの顔を描いたおはかを作った

おおきなみだがポロポロでた

命を大切にすること

教えてくれてありがとう

ずっとわすれないよ カメキチ

とんぼさんありがとう

手子林小学校 六年

鳥海 瑠璃子

とんぼの近くにはとんぼがいる

学校の帰りにはいつも

私たちを見守ってくれている

とんぼはだまって

ひゅいひゅい

次から次へと

ひゅいひゅい

それぞれの場所に向かって

真っ直ぐ飛んでいく

すごいな

私はいつもそう思っていた

人はだれでも迷うことがある

自分だけで考えることや

人にたよって答えを導き出すこともある

だけどとんぼはちがう

意志を持って真っ直ぐ進んでいく

自分の力だけで何でも解決するんだ

本当にすごいな

私は自信がない

手を挙げることに 発表すること・・・

どうすればいいのかがよくわからないのだ

でもとんぼを毎日のように見て思った

どうしようと思える前に

自分が正しいと思っっていることを

しつかり行動に表すことが大切だと

私はとんぼのおかげで

少しずつ自信を持つことができてきた

おとといより昨日

昨日より今日と

授業で手を挙げる回数が増えている

とんぼさん ありがとう

ありがとう

奨励賞

ぼくの大すきなかぞく

須影小学校 二年

江原 清眞

大きなテントをにわにはった
その中にシートをひろげて
おじいちゃんがりよう手にかかえて
いっぱいもつてきてくれたやさいと
にくやウインナーを切って
バーベキューをしてくれた
お父さんとお母さん
お姉ちゃんとおぼくは
トランポリンの上でとびはねたり
ビンゴやいろんなゲームをして
たのしい夜をすごした
テントの中に ホットカーペットと
ふとんをしいてくれた お父さん
口うるさいおばあちゃんが
「さむくない かぜひかないだよ」

といて あったかいスープを
とどけてくれた

秋の夜で すこしさむかった

ねむれないので 外に出て

空を見上げると

お星さまが ぴかぴかひかっついていて

お月さまも まん丸だった

青森のおじいちゃんとおばあちゃんにも

ぼくたちのようすをテレビでん話で

しらせるよ にこにこわらつていた

たのしい たのしい 夜だった

ぼくは お姉ちゃんといけんかして

ときどき おこられるけれど

いつも なかよしでたのしい

にぎやかな ぼくのかぞく

お父さん お母さん

お姉ちゃん ぼく そして犬のさくら

ちかくにすむおじいちゃんとおばあちゃん

青森のおじいちゃんとおばあちゃん

みんな みんな ぼくの

大せつで 大すきな かぞくなんだ

尊い

新郷第二小学校 六年

小澤 陽馬

ぼくの涙はまだ止まらない
君と歩いた道をひとり歩いてみると
あふれ出てくる

ピョンピョンとはねるように歩く君
お行儀よく「まで」をする君
ぼくの中に君はいるのに
ぼくの中の君はいるのに

夕方の田んぼ道
道ばたの草のおいをかいでいる
君はいるのに

犬小屋の中に
玄関のすみに
君はいない

青い空の下を走っている

君はいるのに
緑の首輪の先に
君はいない

君がいたらいいのに

毎日思っているよ 会いたいと

「おはよう」と朝起きた時

「ただいま」と家に帰った時

君がいたらいいのに

ひまわり

三田ヶ谷小学校 二年

木村 瑠菜

わたしが元気になれる花

その名はひまわり

まい年 春になるとタネからそだてる

めが出て はっぱがふえ

ぐんぐん大きくなる

かぜがつよく おれそうになっても

サッカーボールがぶつかって

おれそうになっても

わたしの心配を気にもせず

また上をむき 大きくなる

ひまわりはつよいなあ

まい日せいくらべをしていたけれど

あつというまにぬかされてしまった

わたしはたくさんたべてものびないのにな

七月十二日の朝

一ばんに花ひらいたひまわり

わたしのかおがかくれるほどりっぱだ

たねをまいた日はおなじだけだ

花がさく日はちがったね

せのたかさも花の大きさもちがうね

黄色い花びらをひろげて

たいようのひかりをあびている

学校から戻ってくると

玄かんよこの花だんから

「おかえりなさい。」

と言つてくれているようだ

しばらくひまわりをながめた

にっこりわらっているように見えた

青い空に黄色い花

つかれていても元気がでるね

夏休み ひまわりのように

えがおいっぱい元気にすごしたいと思う

ずっとずっときれいにさいてほしい

たくさんなたねがとれることも

たのしみになっているからね

ぼくのお日さま

新郷第一小学校 二年

関根 玲冴

ぼくの体に お日さまがながれる
ぼくも お日さまになる

学校でうえた ミニトマトのなえ

小さなはっぱ ぐんぐんのびて

黄色い しずくのかたちのつぼみ

お日さまのしずく

ひらいたら 黄色いのがった花びらで

なんだかお星さまみたい？

花がかれたら 小さい小さいみどりのつぶ

だんだんふくらんで

黄色くなって

オレンジになって

赤くなってきて

もつともつと太ようで日やけして

こい赤色になった

小さいお日さま四こ

もつと日やけしたら

おいしくたべてあげる

ぼくのおとうさん

手子林小学校 一年

堀田 アンジエロ

ぼくのおとうさん
うまれたくには、ペルー
いったことはないけれど
にほんからは、
とおいくに
ひこうきにのって
いくのかな
はなしてみたいな
スペインご
みてみたいな
せかいいさんの
マチュピチュ
おどってみたいな
サルサ
たべてみたいな
ペルーりょうり
ぼくのおとうさん
いつもぼくを

たくさんたくさん
だきしめてくれる
ぼくのたいせつなおとうさん
いつかいつしよに
いつてみたいな
だいすきなおとうさんの
ふるさと、ペルー

その他の良い作品

作品は羽生市のホームページでご覧いただけます。

題	学校名・学年	氏名
ぼくのランドセル	手子林小学校 六年	猪股 一磨
きゅうちゃんづけ	須影小学校 四年	梅澤 幸杏
ごせんぞ様とぼく	手子林小学校 三年	佐藤 雪州
空手道	須影小学校 四年	澤田 俊輝
かえるみちのかえるくん	新郷第一小学校 一年	関根 璃空
ふるさと	手子林小学校 四年	高橋 和泉
いってきます おじいちゃん	井泉小学校 二年	塚田 美心
ふるさと	手子林小学校 一年	野本 望乃
利根川サイクリングロード	井泉小学校 三年	諸星 斗真

◎中学生の部

太田玉茗賞

快晴の空を進む雲

南中学校 三年

関根 快

真つ青な夏の空に

ぼっかりと浮かぶ雲を見てふと思う

あの まあるい綿飴みたいな形をした雲は

これから どう形を変えていくのだろう

この広い空の

どの方向へ流れていくのだろう

なんだか 僕の心の中の様だ

この真つ青な空と僕の心が同調する

僕の心の中にある 希望 不安 それと

自分自身へのちよっぴりの期待

様々な気持ちが一気に溢れ出す

僕の心の中から ぼわんと何かが

飛び出した

はっと空を見上げる

ぼっかりと浮かんでいた綿飴雲は

さつきとは少し形を変えながら

太陽に向かい進んで行く

僕も変わっていこう

変わっていく自分を楽しもう

進んでいく自分を信じてみよう

光さす未来へ

自由に形を変えながら

僕は進んで行く

宮澤章二賞

じいちゃんの日課

東中学校 三年

福田 みさ

「いってきます」

そう言って家を出る

庭にはいつも自転車が私を待っている

毎朝 じいちゃんが車庫から出して
くれるのだ

どんなに暑い日も寒い日も

雨が降っている時は濡れない所に出して
くれる

部活をしていた頃の金曜日の夜には

「明日も部活か？朝早いん？」

と私に聞いて すぐ朝早い時
も出して
くれた

私には四つ上の姉がいる

姉が中学生だった時も じいちゃんは自転車を庭に出してくれていたそうだ

私が中学生になったばかりの頃 姉が私に

「またじいちゃんの日課が始まるね」

と言った

そうか じいちゃんにとってこれは一つの

「日課」だったのか

そう思うと何だか心が温かくなった

もう少しで私は中学校を卒業する

高校では恐らく自転車を使うことはほぼ無くなるだろう

だから私の卒業と同時にじいちゃんもこの日課から「卒業」することになる

でもこれから先私が大人になっても このじいちゃんの日課を忘れることは無いだろう

今日も 自転車が私を庭で待っている

「じいちゃん、ありがとう」

そう思いながら勢いよくペダルを漕いだ

優秀賞

藍色は勝色

西中学校 一年

倉橋 樹弘

藍色は勝色

藍色は羽生の色

いざ勝負

前の試合で負けたのをきっかけに

僕は稽古にはげんでいた

毎日必ず すり足と素振りをしてきた

今日こそ勝つ

心の支えは自分の努力と

今、着ている道着だ

羽生の藍で染めた道着は安心する

昔から守って来た技術と

藍を愛してきた先人達の

思いが詰まっている気がしている

前にこう聞いたことがある

藍色は勝色で藍染は羽生市が

大切にしていることなんだよ

僕はこの言葉を噛み締め試合に臨んだ

面あり

努力と藍染を誇りに思った

利根川がくれるもの

東中学校 三年

齊藤 雅人

土手に駆け上がり
見つめるその景色

川の水は反射し
宝石のように光り輝く

土手や岸の草木は
力強く太陽に向かって手を伸ばす

利根川は精気に
満ちた場所だ

だからだろうか
僕はそうなりたいとおもった

どんな急な流れだろうと
一つ一つ違う光を放つ川のように

どんなに踏まれ流されかけようと
土に根を張り何かに向かって
手を伸ばす草木のように

利根川は僕に希望をくれる
神秘の場所

僕の大事なふるさと

祖父の愛した羽生

南中学校 三年

藤井 萌恵

祖父は羽生が大好きだった

一面に広がる田んぼ

きれいに整えられた施設や設備

毎日を普通に過ごせるこの環境

祖父は塾の送迎をしてくれる車の中で

色んな景色を見てきれいだなと言ったり

急にアイスを買いに色々な所へと

連れて行ってくれたりした

私の祖父は 昨年亡くなった

大好きな紅葉が紅くなるのを見る前に

祖父と自転車で行った散歩道

葛西用水路沿いの桜を見ながら走る

弟が生まれてからは三人で散歩に行った

文化ホールの横を通るトラックに向かつて

祖父と弟で全力で手を振っていた

祖父はいつも私が落ち込んでいと

空を見てごらん じいちゃんもいつも

何かあったら空を見上げるんだよ

そうすると気持ちが落ち着いてくるだろ
だから仕事も頑張れるんだよ と言って

私のことを励ましてくれる

だから私はいつも 何かあったり

モヤモヤしたりする時は外に出て空を見る

私もこの羽生が大好きになった

受験生になった今

祖父の言葉を胸に そしてこの環境と共に

大きな壁を乗り越えたいと思っっている

じいちゃん 天国から見守っていてね

全力で頑張るから

私自身も羽生と共に成長していきたい

祖父の愛した羽生と共に

奨励賞

もう一つのふるさと

東中学校 三年

五十嵐 千翔

ちようど一年前

私は、はるか遠くバギオの地に居た

バギオのひやつとした空気

一面に立ちこめる深い霧

目に映る人々や町並み

すべてが新鮮だった

私は、羽生市主催の中学生海外派遣に参加

したので

その中で、私を迎え入れてくれたホストフ

アマミリー

彼らと過ごした時間はかけがえのないもの

となった

ショッピングへ出かけたり、芸術家である

お父さんのアトリエにお邪魔したり

最初はしどろもどろだった会話

しかし、時間を共有するにつれ気持ちが通じる様になっていった

そして、ホストフアマミリーは、国や言葉の壁を越えてかけがえのない家族へと変わっていった

そんな中迎えたお別れの日

ホストフアマミリーから赤い日記帳をプレゼントされた

そこにはお父さんが描いてくれた優しい表情の女の子の絵があった

そして

You have left a big space in our hearts.

—あなたは、私たちの心の中に大きなものを残してくれました—

というメッセージ

私も全く同じ気持ちだった

バギオでの思い出が走馬灯の様に駆け巡ったそれは、この地が私の「ふるさと」になった瞬間だった

私はこれからも、二つの「ふるさと」羽生

とバギオを繋ぐ架け橋でありたい

思い出

南中学校 三年

大屋 涉悟

ツーツとしたたる汗
タッタッタと近づく足音
ハッハッハと迫る呼吸
負けたくない
相手にではない、自分に

今日、最後の県大会
色んな思いがこみ上げてくる

柔らかな日差しの春、
ぼくは陸上部に入部した
太陽が照りつける夏、
辛く楽しい合宿をした
空高く感じる秋、
タスキをつなぎひとつになれた
冷たい風が吹きつける冬、
眠い目をこすり走り込んだ
そんな日々を過ごしてきた

暑いのもみんな一緒
辛いのもみんな一緒
自分に言い聞かせる

自己ベストが出た
みんな自分の事のように喜んで
嬉しかった
ぼくは忘れない
この三年間を

うちのお米

東中学校 三年

神田 憲伸

うちのお米は祖父が作っている
ミルキークイーン

冷めてもモチモチしておいしい
祖父は電気を作る工場に勤めながら
お米を作っていたそうだ

その祖父も、もう八十三歳
今はおじさんが手伝っている
そしてうちの母と一緒に僕も手伝う
稲の種をまく仕事だ
いとこも手伝いに来る
でも祖父は家の米づくりのことを
いつも心配している

手伝いをしているおじさんは学校の先生
たまに手伝う母も学校の先生
ぼくといとは野球部と吹奏楽部で忙しい
田んぼを人に貸したくても
やってくれる人がいない

最近では大型デパートが

この辺りの田んぼを借りて

子ども達に田植えや稲刈りを体験させている

「うちの田んぼも売ろうかな」

と祖父が寂しそうにつぶやく

「いい案だね」

と兄が言う

「しっ」と母が口に指を当てる

田んぼを手放すということは

相当覚悟がいるらしい

曾祖父よりもっと前から受け継いだ

土地を守るのはとても大変なことだ

私たちはこの田んぼを守るのだろうか

そう考えると僕も心配になる

うちのおいしいお米が

いつまで食べられるのかな

友達と

東中学校 二年

野口 弥郁

その笑顔は どんなものよりあたたかい

友達と過ごす日々は幸せだ

うれしいことも 何気ないことも

暑いときも 寒いときも

これからもずっとずっと そうでありたい

春風が心地良い

遠くから聞こえる友達の声が

いつもより透き通っている

青空の下 走り出す

梅雨の中 夏祭りが待ち遠しい

友達と どの屋台に行こうかと

気の早い話をするだけで

私の心は 晴れていく

秋晴れがすがすがしい

登校中 友達と見るコスモスが

優しく笑いかけている

寒い冬はストーブが恋しい

休み時間に友達と

ストーブの前に集まると

自然と笑顔が広がっていく

希望の花

南中学校 三年

早川 紗永

来春、私は高校生
希望に満ちた一輪の花を
咲かせるために

春
私の好きな季節

我が家の窓には
希望に満ちた世界が広がる
桜の中を笑顔で歩く人たち

花を楽しめるのは本当にあつという間
でもこんなにも心おどるのはなぜだろう

私は知っている

夏は暑さに

秋は木枯しに

冬は寒さに

じつとたえる

花を咲かせるその日まで

今年もそんな桜になろう

その他の良い作品

作品は羽生市のホームページでご覧いただけます。

題	学校名・学年	氏名
引越してきて良かった素敵な街羽生	南中学校 一年	安部 雛花
ふるさとを照らす太陽	南中学校 三年	川島 彩
中学生になって	東中学校 一年	小針 結花
愛犬と一緒に	南中学校 一年	田口 夏鈴
四季折々の川	東中学校 二年	千葉 咲綾
病	南中学校 一年	鳥居 桜花
通学路の大きな木	南中学校 三年	干場 萌
おばあちゃん	東中学校 三年	矢吹 桜楽



第十五回 小中学生「ふるさとの詩」募集要項

利根川の流りに生まれ、四季おりおりの美しい自然に恵まれた羽生市は、日本の近代詩史に名をとどめた、太田玉茗を生んだまちであり、田山花袋の小説『田舎教師』のふるさとのまちです。

また、羽生市出身の宮澤章二は、市内の多くの校歌を作詞した詩人です。

この二人を郷土の偉人として尊敬し、顕彰するためにも、みなさんの「ふるさと」を一篇の詩にして、応募してみませんか。

●募集作品

- ・ 「ふるさと」を題材とした作品、または自由題
(家族、友だち、自然、伝統行事など、心に感じたことを書いてください。)
- ・ 自作で未発表の作品（過去に書いた作品でも構いません。)
- ・ 応募作品数は一人1篇

●応募方法

- ・ 400字詰め原稿用紙B4縦書、表題・氏名・本文で2枚以内の作品。
- ・ 各学校で取りまとめ、名簿を添付のうえ提出をお願いします。

●応募資格

- ・ 市内の小学生・中学生

●応募締切

- ・ 令和元年9月6日（金）

●発表

- ・ 令和元年11月下旬に通知

●賞

- ・ 小学生の部・中学生の部
各部門とも、太田玉茗賞 1篇、宮澤章二賞 1篇、優秀賞 3篇、奨励賞 5篇
- ・ 賞状と盾を贈呈します。

●その他

- ・ 応募作品の著作権は主催者に帰属し、作品は返却しません。
- ・ 入賞者の作品・氏名・学校名・学年については、広報及びホームページに掲載するほか、報道機関等に公表します。
- ・ ホームページには、過去の作品も掲載されておりますので、参考としてご覧ください。

●主催 羽生市

●応募・問合せ先

羽生市役所秘書広報課 〒348-8601 羽生市東 6-15 Tel.561-1121(内線 204)



●第十五回 小中学生「ふるさとの詩」募集結果

小学生の部	822篇
中学生の部	852篇
応募総数	1,674篇

●選考委員（五十音順）

塩田 禎子
根岸 光子
萩原 澄江
蓮見 典昭
水野 栄子

発行者 羽生市総務部秘書広報課

発行日 令和2年1月30日

